

バルト＝カミュ論争再考：『ペスト』における歴史記述の問題をめぐって

千々岩，靖子
京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了

<https://doi.org/10.15017/18942>

出版情報：Stella. 29, pp.45-58, 2010-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

バルト＝カミュ論争再考

——『ベスト』における歴史記述の問題をめぐる——

千々岩 靖子

カミュの『反抗的人間』は、1951年に出版されるや、依然共産主義を信奉するフランス知識人のあいだに猛烈な反発を引き起こした。当時共産党に急接近していたサルトルによる糾弾は周知だが、それに続き「史的唯物論の名のもとに」¹⁾カミュの「反歴史性」を論難したのがロラン・バルトである。

ロベール・カルリエ主宰の月刊誌『クラブ』（46年設立の「フランス書籍クラブ」を母体として53年1月創刊）が論争の舞台となった。同誌1955年2月号には、バルトによる批判「『ベスト』——疫病の年代記か孤独の小説か？」と、これを前もって読んだカミュの公開書簡とが同時掲載される。カミュの反論にバルトは4月号掲載の短い「返答」で応えたが、もはや作家が発言することはなく、論争自体は早くもその時点で終結してしまう。たしかに事の経緯を眺めるかぎり、ここには対サルトル論争のような華々しさはない。だがカミュの小説創造という観点に立つならば、バルトとの遣り取りは先行の論争に勝るとも劣らぬ重要性を有していたのではないか。これが本稿の問題設定である。

バルト論文は『ベスト』一作のみを対象にした言説として紹介され論じられるのが常であった。しかも同論文の発表が小説出版の8年後という時間的な懸隔は一顧だにされず、また論争が事後カミュの創作活動に及ぼしたはずの影響もほとんど等閑視されてきたのである。したがって本稿では、同時代的コンテクストを視野に収めつつ、当該論争の具体相について再検証を試みる。

*

バルトはカミュにたいする関心を早くから示している。彼が批評活動を本格化させたのは1950年代だが、それに先立つ1944年、「『異邦人』の文体につい

での考察」を公表²⁾、1953年には『エクリチュールの零度』において『異邦人』の文体を再度取りあげ、これをフランス文学史における文体の最終形態と位置づけた。翌年には、同作における太陽の重要性——ギリシャ悲劇と通底する宿命という役割——について論じているが³⁾、これらの論考からは、バルトがいかに『異邦人』を高く評価していたかが紛う方なく読み取れる。彼はこの小説に伝統と革新の見事な融合を認めたのである。だが上述の『ベスト』批判以降、バルトがカミュ作品に言及することはない。モーリス・ブランショが、カミュの処女作『裏と表』から彼の死に至るまで、小説や哲学的エッセー、戯曲を含めほぼ全作品について倦まず論じたのとはまさに対照的と言える。バルトはロブ＝グリエと同じく⁴⁾、カミュ作品ではただ『異邦人』だけを特権的に評価していたのだ。

ではなぜ彼は刊行から8年も経って『ベスト』を俎上に載せたのか。第一に指摘すべきは、マルクス主義に傾倒し弁証法的演劇論を展開していたドイツ人劇作家ベルトルト・ブレヒトとの衝撃的な出会いであろう。1954年5月『肝っ玉おっ母とその連れ子たち』のパリ上演に感激したバルトは、同年7月の『オブセルヴァトゥール』誌上でブレヒト劇を評し、観客を「歴史のより深遠な意識」へと導く「我々の時代の歴史に見合った」演劇であると最大級の賛辞を送っている⁵⁾。このように歴史性の有無を芸術の主要な評価基準に据えた当時の彼にとり、『反抗的人間』で打ち出されたカミュの「反歴史的」姿勢が批判対象として強く意識されたことは想像に難くない。さすれば、物語の進行が現在時に限定される『ベスト』がその否定すべき先駆として時新たに浮上したとしても何ら驚くには当たらない。

一般には構造主義者・記号学者として認知されているバルトだが、50年代までは、マルクス主義を標榜しないまでも⁶⁾、それと実存主義・「アンガジュマン」の強い影響下にあったこともまた指摘しておかねばならない。この影響関係を端的に示すのが『エクリチュールの零度』である。同書でバルトは、サルトルの『文学とは何か』(1948年)が明らかにせんとした文学と歴史・社会の相互作用を、文学形式・文体の通時的考察によって捉え直そうとしたのである⁷⁾。このような思想的系譜のなかで、彼がサルトル＝カミュ論争を下敷きに、前者に与する立場から『ベスト』を論じることは当然の帰結であった。「作者にとって『ベスト』は孤独への道の始まりとなった」⁸⁾という指摘も、当該論争後の知識

人界の状況を踏まえたとはいえず、初めて可能になったのと言えるのではない。小説出版当時のカミュは右翼陣営からは疎まれてはいたものの、決して孤立していたわけではなかったからだ。バルトは、そのカミュを窮地に追い込んだ『反抗的人間』からさらに過去へと遡り、同じく「反抗」の系譜に連なる『ペスト』の「反歴史性」のうちに作家の「孤独」の淵源を探ろうとしたのである。

*

『ペスト』におけるモラルの「反歴史性」にたいするバルトの問題提起は、「アンガジュマン」の立場から繰り返されてきた批判の焼き直しであり、それ自体とくに目新しいものではない。「『ペスト』の出版以来、カミュをフランスの一部の知識人たちと対立させる誤解」の原因となった「連帯のモラル」について、バルトは以下のように述べている――

連帯というモラル——熟慮された政治的内容の連帯性——は事物の悪とたたかうには十分でありえるが、人間の悪とたたかうには十分であろうか。「歴史」には非人間的な災厄ばかりではなく、戦争や圧政といった非常に人間的な悪もある。それらの人間的な悪は災厄以上ではないとしても、同じくらいに殺人的だ。それならば、医師であるだけで十分だろうか。自分の番として死刑執行人になることを恐れ、傷の元凶たる行為を攻撃しないで、傷を手当てするだけで満足するべきだろうか。攻撃してくる人間を前にして人間は何をなすべきだろうか。⁹⁾

バルトの主張は、ナチスを自然の災厄に重ね合わせることで、カミュが「歴史」から逃避していると考えたポーヴォワールの論定、あるいは『ペスト』のモラルを「赤十字のモラル」と揶揄したフランシス・ジャンソンの批判とも通底している¹⁰⁾。カミュはこの見解にたいして、『ペスト』は『異邦人』とは異なり、参加と連帯への発展を示していると反論する。だがカミュは、このモラルの批判者はそれに勝るものを提示すべきだと言いながら、自身のモラルを詳らかにすることはしない¹¹⁾。たしかにペストは天災であって人災ではない。しかしだからといって、「連帯のモラル」が戦いそのものを回避し、「歴史」参加を拒否する態度であると結論づけることも短絡に過ぎよう。『ペスト』のモラルを単なる人命救助作業としか見なさぬ批評家たちは、「ペスト」に込められた意味を汲み

取っていない、または曲解している、そう言わねばなるまい。

タルーが発起人となって結成された「保健隊 formations sanitaires」は、一見「赤十字」と同義と捉えられがちだが、実際は似て非なるものである。「赤十字」とは、戦争にさいし敵味方の区別なく、中立の立場で人道的支援を行う組織であり、その活動は原則としてあらゆる攻撃から保護されている。これに対し保健隊は、絶対悪ペストに決して同意することなく、積極的に戦う立場をとる。またその活動は命がけである。保健隊員は血清を施されてはいても感染を完全には免れえないからだ。戦いへの不参加という点では、恋人と再会するために街からの脱出を試みるランベールの行動が典型的である。

ペストとの戦いを回避することは疫病の被害拡大を黙認することにほかならず、さりとて保健隊員はペストと戦うかぎり、感染の危険性に身をさらすことになる。この「ペストの感染」とは、単に命が奪われることだけを意味するのではない。自身があらたな感染源になってしまう2次的リスクをも孕んでいるのだ。かかる袋小路こそが『ペスト』の世界であり、作家が小説を通じて表現しようとした「悪」の本質である。それゆえ『ペスト』のモラルを、「悪のもたらす諸結果の手当をするだけというのでは、人間をその悪の共犯者にしてしまう虞がある」¹²⁾と誹るバルトの善悪二元論的な小説理解は、全くの的外れと言わねばなるまい。小説に込められているのは、「悪にたいしては断固戦うべきである。だが同時に〈悪〉との戦いに参加することによって、自らもまた〈悪〉と化す可能性があることを十分に自覚し、己の行動を厳しく律しなくてはならぬ」というメッセージであろう。『ペスト』の語り手はこう述べている——「世界に存在する悪は、ほとんど常に無知に由来する。善き意志も、それが分別あるものでなければ悪意と同じくらい多くの害を引き起こしうる」¹³⁾。

カミュはこうした「悪」にかんする見解を、対独協力者肅正問題をめぐるモーリヤックとの論争を経て、いわば反省的に導き出したのである¹⁴⁾。その意味では、作家のレジスタンス体験を色濃く反映したタルーと、善良な市民グランが迎える対照的な結末は示唆に富む。死刑制度から成り立つ社会を嫌悪し、社会変革のために各地の闘争に加わったタルーは、自身の「悪」にたいする盲目的な戦いそのものが、新たな「悪」を誘発していたことに気づき愕然とする。「この街やこの疫病を知らずと前からペストに苦しんでいた」¹⁵⁾と告白するタルーは、最終的にペストに罹って死ぬ。一方で、同じく保健隊員だが、「ペスト

から遠く離れた」¹⁶⁾ 人物であるグランは、疫病に感染しながらも回復し、オランにおける最初の生還者となった。物語ではあまり目立たぬグランだが、じつは真の英雄として最も倫理的に評価されているのである¹⁷⁾。

*

「アンガジュマン」と立場を同じくするバルトは、カミュのモラルにおける「反歴史性」を批判したが、彼の主張の独自性は、論拠を小説の「反歴史的」記述方法に求めた点にある。彼はリトレによる「年代記 *chronique*」の定義に抛りながら、『ペスト』は因果関係からなる「歴史」を物語っておらず、時系列に沿った事実の継起を描いた「年代記」にすぎないとし、この小説を「歴史を奪われた世界」¹⁸⁾ だと評して、次のように述べる――

「ペスト」には構造もなく、因果関係もない。過去や他の場所、他の事実といったよそと「ペスト」には何のつながりもない。一言でいえば、〈関係性〉がないのだ。¹⁹⁾

この指摘は正しい。なぜなら、小説の語り手が「記録作者 *chroniqueur*」²⁰⁾ を自称しているからだ。彼はまた「歴史家 *historien*」²¹⁾ という肩書きを持ってはいるものの、それは単に史料や人々の証言に接する立場に在ることを意味するにすぎない。語り手は、事件の因果関係を把握しようとする俯瞰的な視点に立とうとはせず、あくまで犠牲者の側に立った「客観的な証人」「善意の証人」²²⁾ に留まることを望み、「こういうことが起こった」²³⁾ といった素っ気ない報告に終始する。

また前掲引用中で『ペスト』における「関係性」の欠如を指摘するバルトの見解も正鵠を射ていよう。これを理解するためには、小説執筆の際にカミュが参考にしたダニエル・デフォーの『ペスト年代記』(1722年)の冒頭を想起すればよい。ペストは疫病ゆえ、大抵の場合どこか別の場所からやってくる。『ペスト年代記』も、この病が一体どこかの街からきたのかを、ロンドン市民があれこれ議論する場面から始まっている。だがカミュの小説では、ペストは自然発生的に突如あらわれる。どこからやってきたわけでも、どこへ行くわけでもない。オランの街ひとつで、すべてが完結する。また疫病流行による市門の閉鎖は、住民の単なる空間的な隔離という状況を指すのではない。未来への希望を奪わ

れ、かつ過去への追憶にも救いを見出せない彼らは、「それぞれが一日一日を生きることを受け入れなければならない」²⁴⁾ 状態に陥る。つまり時間の観点からみても孤立するのだ。したがって『ペスト』で描かれているのは、あらゆる関係性が遮断された完全なる閉塞状態にほかならない。

因果関係を欠き、人間の理解を超えた絶対悪の象徴である「ペスト」は、古代ギリシャ悲劇の宿命と同じ役割を果たしているとバルトは言う。オランの状況がいかにナチスによるパリ占領と酷似していようとも、歴史的事実としての「占領」の表象とはなりえない。したがって彼の結論は、現に存する人間の悪に對抗するには『ペスト』のモラルは有効ではない、というものであった。ペストはあくまでもペストであって、「占領」とは別物である。「占領」を描くためには、「ペスト」という隠喩に訴えるのではなく、「占領」という歴史的事実そのものを真正面から描かねばならない。すなわち、「この作品は〈歴史〉への意識から生まれたにもかかわらず、〈歴史〉に明白な事実を求めようとせず、明晰さをモラルに変える方を好んでいる」²⁵⁾、そうバルトは批判するのである。ブレヒト劇に傾倒するバルトにとって、ある歴史的状况を文芸作品に描出する際には、カミュが用いたような寓意的な「表現 expression」ではなく、歴史的事実に立脚した直接的な「説明 explication」のほうが理想的だったのであろう²⁶⁾。

これに対してカミュは次のように反論する――

『ペスト』がいくつかの射程で読まれることをわたしは望みましたが、しかしながらこの小説は、ナチスにたいするヨーロッパの抵抗の闘いを明白な内容としています。その証拠に、ヨーロッパすべての国において、名指しされていないこの敵を誰もがナチスだと認めました。『ペスト』のある長い一節は、占領下の時期に闘争文集で発表されましたが、こうした事情はそれだけでも、わたしの行った置き換えを正当化するであろうことを付け加えておきましょう。『ペスト』は、ある意味では抵抗の年代記以上のものなのです。だがもちろん、それ以下ではありません。²⁷⁾

たしかにカミュが主張するように、20世紀の小説の題材としてはいささか時代遅れともいえる疫病を扱った『ペスト』が、出版とほぼ同時に読者の圧倒的な支持と共感を得たのは（出版翌年には早くも欧米の10カ国ほどで翻訳された）、この作品が過ぎ去ったばかりのナチスとの戦い――ナチスは当時その軍服の色から「褐色のペスト peste brune」と呼ばれていた――の生々しい痕跡をとど

めていたからである。出版当初の大多数の読者は、たしかに「ベスト」を「ナチス」に重ね合わせていたのだ。「ベスト」に「ナチス」の寓意を読むことを拒むバルトの姿勢は、やはり戦後の熱狂が収まった時期になってはじめて取りうるものではあるまいか。

じっさいカミュは様々な工夫を凝らして、ナチスによる占領という歴史的現実を読者に喚起している。まずデフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719年)に借用したエピソードが「ベスト」の寓話的解釈を促す。小説の冒頭に記された「194*年」という歴史的時間の指標もまた、「ベスト=ナチス」という解釈を導くのに一役買ってしよう。またジャンイヴ・ゲランは、ベストに襲われたオラン市民の状況が、占領下のフランスのそれをいかに忠実に反映しているかを検証している²⁸⁾。『ベスト』に盛り込まれたのは、嚴重に監視された境界線によって2つに区切られた土地とそこからの脱走の試み、戒厳令下の夜間外出禁止令、外部との唯一の接点であるラジオ、紙不足、ガソリンの配給制、食糧不足と商店前の行列、闇市場、といった占領下における市民の日常生活だけではない。感染者の家族が強制的に送り込まれる「隔離収容所 camps d'isolement」²⁹⁾はナチスの強制収容所を容易に連想させるものだ。また、疫病発生に神の怒りの顕現を見、住民に向かって生活を反省し悔悛することを説くパスルー神父の最初の説教は、ジャン・サロッキが指摘するように、パリ占領当初にカトリック教会が流布させた言説をほぼそのまま模したものである³⁰⁾。市門の開放を祝う街の描写もまた、作家自身が体験したパリ解放の熱狂を伝えている。さらには、小説の最後で初めて語り手が自らの正体を明かすという奇抜な設定も、同じく作家自身のレジスタンスの経験から想を得たのだろう。占領下で偽名の使用を余儀なくされていたレジスタンス活動家たちは、パリ解放後にはじめて自分の名前を公に明かすことができたからである。

「アンガジュマン文学」にもプレヒト劇にも共感を示さないカミュは³¹⁾、バルトにたいして「私は芸術におけるリアリズムを信用していない」³²⁾、と簡潔に答えるのみだが、しかしこの言は、「ベスト」に因果関係が欠如しているという後者の指摘については十分な回答たりえまい。では、「歴史」の文学的表現をめぐる双方の意見の齟齬をどのように考えればよいのだろうか。

前述のとおり、『ベスト』はパリ占領という歴史的事実にも立脚しており、そうした意図は当時の読者にも十分に伝わっていた。小説に歴史的状況を取り込め

うとするカミュの志は、同じくファシズムの寓意を試みたウジェーヌ・イヨネスコの戯曲『犀』(1959年)と比較するならば、さらにいっそう明確になるはずだ。文学形式の違いもさることながら、ナチスの隠喩として「ペスト」を用いるのと「犀」を用いるのでは、「歴史」にたいする忠誠の度合いはまったく異なっただろう。市民が次々と犀に変貌していくイヨネスコの不条理劇は、およそナチスとは結びつかぬ「犀」を隠喩に用い、コミカルな効果を生み出すがゆえに歴史的読解に縛られることはない。これに対し、スーザン・ソントグが明らかにしたように、社会的悪を疫病に仮託するのは、古代にまでその起源を遡ることのできる文学的な常套手段である³³⁾。カミュは「ペスト」という設定に訴えて、占領下についての歴史的な証言を残そうとしたのだ。

たしかに、「ペスト」は「占領」ではないとするバルトの意見にも一理ある。実際のところ、占領体験のない現在の読者は、各自のおかれた状況に応じて、「ペスト」にナチスとは別の「悪」の寓意を見いだすであろう。しかしながら、この小説が「いくつかの射程をもって読まれる」ことは、作家が意図したところであった。ハーマン・メルヴィルの『白鯨』(1851年)を手本にカミュが目指したのは、「占領」の寓話であると同時に、それには縛られない多様な解釈を可能にする神話の創造だったのである。先に引いた『「ペスト」』は抵抗の年代記以上のものであって以下ではない」という発言は、作家のこうした野心を如実に示している。ただしカミュの発言は当時としては妥当であっても、寓意である以上、「ペスト＝ナチス」という読解が成立するのは限られた期間であろう。かりに後世の読者をも意識して、この小説を「ナチスにたいするヨーロッパの抵抗の闘い」として提示するのであれば、おそらく彼は寓意という表現形式は避けたはずである。

では、カミュが黙殺する「因果関係の欠如」という批判についてはどうだろうか。これも単なるリアリズムの是非という問題だけでは片付けられまい。なぜなら、たとえカミュが占領という事件を「歴史に忠実に」描いていたとしても、確固とした因果関係に律せられた小説にはおそらくならないからだ。バルトが求めたのは、ナチスをありのまま描くこと、つまりナチスがどのようにして台頭しフランスを占領したのかという、「本来の歴史的意味」³⁴⁾に貫かれた原因と結果の「説明」である。だが、第2次大戦勃発直後の『ル・ソワール・レピュブリカン』紙に連載された一連の記事、およびレジスタンス活動中に執筆

された『ドイツ人の友への手紙』が示すように、カミュは第2次大戦やパリ占領にかんして、それらの原因を過去に求めることも、因果関係を「説明」することもなかった。むしろ彼が過去を無視しているわけでは決してなく、歴史に因果律を見る思考方法を良しとしなかったためである³⁵⁾。

パヌルー神父の初回の説教と占領当初のカトリック教会による言説とが相同である点についてはすでに触れたが、実のところ共通点はそれだけにとどまらない。「皆さん、あなたがたは不幸のなかにいます。皆さん、それは当然の報いなのです」³⁶⁾ というパヌルーの発言に象徴される因果応報的な考え方は、敗戦直後のフランスの世論においても支配的であった。典型的な例は、敗戦を報いとして受け入れ、ベタン元帥に従い、甘んじてナチスの占領を受け入れよ、といった意見である。なによりも国民全体に精神的な大打撃を与え、当時の知識人たちを悩ませたのは、敗戦を一体どのように捉えたらよいのか、なぜフランスはかくもあっさりとドイツに敗北してしまったのか、という問題であったが、人々が自国の過去の愚行に解答を探すなか、カミュは、フランスのいかなる過去の過ちも、ナチスがフランス人に暴挙の限りを尽くし無辜の人間を殺したことを正当化しないと主張したのだった。

*

「占領」という歴史的事件にたいする因果論的な解釈を拒絶したカミュであったが、しかし彼にとってバルトの指摘は新たな問題提起となったと考えられる。というのもバルトの批評は、1954年11月に勃発したアルジェリア独立戦争の直後という、新たな歴史的文脈のなかで発表されたからだ。この戦争を1830年のフランスによるアルジェリア征服の帰結と見なすならば、「植民者 vs. 被植民者」という構図からなる歴史の因果関係をどう捉えるかという問いがカミュに突きつけられたはずだ。周知の通り、この独立戦争においてカミュは「宗主国」フランス側にも「原住民」側にも与せず、アルジェリアを「真の祖国」とする「アルジェリアのフランス人」としての立場から発言し続けた。第2次大戦期における日本帝国主義の歴史を語る際に、満州開拓移民の存在が座視されたように、作家の帰属した貧しいヨーロッパ系移民たちは、フランス植民地の歴史という大きな物語に呑み込まれてしまう存在だった。戦争の犠牲者であり「植民

者」でもあった満州開拓移民の引揚げ者たちが、日本帝国主義の汚点として蔑視され、戦後長らく発言の機会さえも奪われていたのと同じく、カミュが代弁するアルジェリアのフランス人たちもまた植民地主義の手先のごとく不当に扱われ、現在に至るも彼らの証言が顧みられることはない。

遺作となった未定稿『最初の人間』は、『ベスト』以上に歴史的事件の反映した小説である。カミュが前者を自伝的小説として着想したのは、アルジェリア戦争勃発以前の1953年10月のことである³⁷⁾。しかし遺された草稿の大半は1958年の秋以降に集中して書かれており³⁸⁾、泥沼化した戦争の影響を受けた部分が多い。しかもこの小説には、ただひとつの歴史的事件に触発された『ベスト』とは異なり、普仏戦争、モロッコ戦争、両次大戦といったヨーロッパの動乱の記録ばかりか、アルジェリアの植民者の歴史までもが盛り込まれており、自伝という当初の基本方針をはるかに越える壮大な企図が透けて見える。おそらくカミュは自伝という枠組みよりもさらにスケールの大きな歴史的視座から「アルジェリアのフランス人」という集団のアイデンティティを再考し、その一員としての「社会的自己」を捉えようと試みたのだ。かかる計画の変更にこそ、バルトによる批判の影響が見てとれまいか。すなわち、「弁証法的歴史」の観点に立つサルトルによる非難への対応、いやそれよりも『ベスト』を「反歴史的」小説と断罪するバルトへの回答として、『最初の人間』は構想されたのである。同作においてカミュは初めて真正面から「歴史」を描こうとしたが、もちろんそれは批判者たちに阿たからではなく、歴史的論理なるものは「歴史」には無効であり、また「歴史」が弁証法的な観点から捉えきれないことを証明しようとしたからにはほかなるまい。

註

- *) 本稿は平成22年、京都大学大学院文学研究科に提出した学位請求論文『アルベール・カミュにおける歴史認識の問題』の第3部7章に若干の修正を施したものである。
- 1) Roland BARTHES, «Réponse de Roland Barthes à Albert Camus», *Club*, avril 1955, repris dans ses *Œuvres complètes*, Paris : Éd. du Seuil, 5 vol., 2002, t. I, p. 573.
 - 2) Roland BARTHES, «Réflexion sur le style de *L'Étranger*», *Existences*, n° 33, juillet

- 1944, repris in *ibid.*, t. I, pp. 75-79.
- 3) Roland BARTHES, «*L'Étranger, roman solaire*», *Club*, avril 1954, repris in *ibid.*, t. I, pp. 478-481.
 - 4) ロブ＝グリエはヌーヴォー・ロマンの文学的源泉としてフローベールを筆頭に挙げる一方、『異邦人』の第1部が自己の文学的出発におよぼした決定的な影響、そしてこの作品の革新性についてたびたび言及している。彼はリアリズム小説にたいするアンチテーゼとして『異邦人』を評価する。そもそもリアリズム作家は現実を模倣すると称しながらも、語り手は物語を始める時点ですでに結末までを知っている全知の神の視点を保持している。そして、現実の生とは既知の世界、「私＝世界」で成立する世界ではなく、逆に『異邦人』冒頭が顕著に示すような、「私」の世界にたいする絶対的な不可解さを基盤にしている、こう主張するのである。それゆえカミュの退化を示しているとして『異邦人』以降の作品、とりわけ『転落』に批判的である。 Voir Alain ROBBE-GRILLET, «Nature, Humanisme, Tragédie», dans son livre *Pour un nouveau roman*, Paris: Éd. du Minuit, 1961, pp. 56-58; «Monde trop plein, conscience vide», in *Cahiers Albert Camus* 5, Paris: Gallimard, 1985, pp. 215-227; *Préface à une vie d'écrivain*, Paris: Éd. du Seuil, 2005, pp. 24-25 et 34-38.
 - 5) Roland BARTHES, «Théâtre capital», *France-Observateur*, 8 juillet 1954, repris in *op. cit.*, t. I, pp. 503-505.
 - 6) バルトは、自身をマルクス主義者だと結論付ける批評家たちにたいして、安易な決めつけだと反論している。 Voir Roland BARTHES, «Suis-je marxiste?», *Lettres nouvelles*, 8 juillet-août 1955, repris in *ibid.*, t. I, p. 596.
 - 7) また、当時『民衆演劇 *Théâtre populaire*』誌の編集委員をつとめていたバルトは、演劇における「アンガジュマン」を推進しており、1955年にはサルトルの戯曲『ネクラークス』の批判にたいする擁護もしている。
 - 8) Roland BARTHES, «*La Peste. Annales d'une épidémie ou roman de la solitude?*», *Club*, février 1955, repris in *op. cit.*, t. I, pp. 544-555.
 - 9) *Ibid.*, p. 544.
 - 10) Voir Simone de BEAUVOIR, *La Force des choses*, Paris: Gallimard, coll. «Folio», 2 vol., 2002, t. I, p. 182; Francis JEANSON, «Albert Camus ou l'Âme révolté», *Les Temps modernes*, n° 79, mai 1952, p. 2074.
 - 11) Albert CAMUS, «Lettre à Roland Barthes», *Club*, février 1955, repris dans ses *Œuvres complètes*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol., 2006-2008, t. II, p. 286.
 - 12) BARTHES, «*La Peste. Annales d'une épidémie ou roman de la solitude?*», *op. cit.*, t. I, p. 544.
 - 13) CAMUS, *La Peste*, in *Œuvres complètes*, t. II, p. 124.
 - 14) カミュにおける対独協力者肅正問題にかんしては、西永良成による以下の論文を参

照——西永良成「カミュと対独協力派肅正問題」、『パイディア』第14号、1972年9月、竹内書店、173-207頁。『ペスト』生成に影響を与えた歴史的事件として特筆すべきなのが、1942年11月11日のナチスによるフランス全土占領と、戦後の対独協力者肅清問題であろう。前者は別離のテーマの挿入につながり、後者はタルーの告白のなかに反映されている。生成研究を行ったマリー＝テレーズ・ブロンドーによると、タルーの告白は1946年末に書かれたという。じっさい、この場面は最終稿の前段階のタイプ原稿に書き加えられている (voir Marie-Thérèse BLONDEAU, «Notice de *La Peste*», in CAMUS, *Œuvres complètes*, t. II, pp. 1158-1159)。つまり脱稿直前の最終段階で急速加筆されたエピソードなのである。小説の終わり近くに組み入れられた告白は、疫病を形而上学的意味にまで高める重要な挿話であり、これによって「ペスト」は単なる絶対悪ではなく、悪と戦う主体そのものに蔓延る悪となる。

- 15) CAMUS, *La Peste*, in *Œuvres complètes*, t. II, p. 204.
- 16) *Ibid.*, t. II, p. 90.
- 17) このことは「語り手」のグランにたいする評価のうちに認められる——「リウーヤタルーよりもグランこそが、保健隊の推進力となった穏やかな徳性を実質的に代表する者だと語り手は評価している」(*ibid.*, t. II, p. 126)。「そう、もし人間が英雄と呼ばれるような手本や模範を提示したがるのが本当であるならば、そしてこの物語にひとりの英雄が絶対に必要というならば、わずかな善意と明らかにばかげた理想とをもつ、無意味で目立たないこの人物〔グラン〕を語り手はまさに英雄として提示する」(*ibid.*, t. II, p. 128)。
- 18) BARTHES, «*La Peste*. Annales d'une épidémie ou roman de la solitude?», *op. cit.*, t. I, p. 540.
- 19) *Ibid.*, t. I, p. 541.
- 20) CAMUS, *La Peste*, in *Œuvres complètes*, t. II, p. 37.
- 21) *Ibid.*, t. II, p. 124.
- 22) *Ibid.*, t. II, p. 243.
- 23) *Ibid.*, t. II, p. 37.
- 24) *Ibid.*, t. II, p. 84.
- 25) BARTHES, «*La Peste*. Annales d'une épidémie ou roman de la solitude?», *op. cit.*, t. I, p. 545.
- 26) バルトはカミュへの返信のなかで以下のように述べている——「私は説明のモラルを表現のモラル以上に完全なものとして評価する」(BARTHES, «Réponse de Roland Barthes à Albert Camus», *ibid.*, t. I, pp. 573-574)。またプレヒトにかんしては、「歴史」を「説明」する劇作家であると高く評価している——「演劇人は明晰でなければならぬ。演劇芸術はもはや、不幸や不条理をあらわす表現力だけでは十分ではない。さらに説明しなくてはならないのだ。芸術は批評としての実質も持ち合わせなくてはならない。天賦のオのなす稚戯の時代は終わった。この点においてプレ

- ヒトの例は非常に重要である」(Roland BARTHES, «Pourquoi Brecht?», *Tribune étudiante*, avril 1955, repris in *ibid.*, t. I, p. 576)。
- 27) CAMUS, «Lettre à Roland Barthes», in *Œuvres complètes*, t. II, p. 286.
- 28) Jeanyves GUÉRIN, «Jalons pour une lecture politique de *La Peste*», *Roman 20-50*, n° 2, décembre 1986, p. 10.
- 29) CAMUS, *La Peste*, in *Œuvres complètes*, t. II, p. 198.
- 30) Jean SAROCCHI, «Paneloux, pour ou contre, contre et pour», dans son livre *Variations Camus*, Paris / Biarritz : Séguier et Atlantica, 2005, pp. 318-319.
- 31) 「僕は参加の文学よりも参加する人間のほうが好きだ」(Albert CAMUS, *Carnets 1935-1948*, in *Œuvres complètes*, t. II, p. 1070) と手帖に書き記すカミュは、生涯「アンガジュマン文学」にたいし懐疑的な態度を示していた。これにかんしては、以下の研究を参照—— Pierre-Louis REY, *Camus. Une morale de la Beauté*, Paris : SEDES, 2000, pp. 69-70. またブレヒト劇についてカミュは1958年のインタビューで否定的な立場を取っている (voir Albert CAMUS, «Interview à *France-Soir*», in *Œuvres complètes*, t. IV, p. 651)。
- 32) CAMUS, «Lettre à Roland Barthes», *op. cit.*, t. II, p. 286.
- 33) スーザン・ソントグは『隠喩としての病』および『エイズとその隠喩』のなかで、社会・政治的悪の表象として常套化された、「疫病」の隠喩的使用の歴史を辿っている。また、ナチスの侵略を疫病によって表現した文学作品の例として、カミュの『ペスト』の他に、カレル・チャペックの寓意劇『白い疫病』(1937年)も挙げている。スーザン・ソントグ『隠喩としての病・エイズとその隠喩』(新装版), 富美山太佳夫訳, みすず書房, 1992年, 213-217頁参照。
- 34) BARTHES, «*La Peste*. Annales d'une épidémie ou roman de la solitude?», *op. cit.*, t. I, p. 540.
- 35) このことは、『ル・ソワール・レピュブリカン』紙の記事が明白に示している。この記事においてカミュは、反ナチスを貫きつつも、ヒトラーの侵略行為だけに第2次大戦の原因を求め、英仏の対独戦争を正当化しようとする世論を批判する。すべての国に何らかの責任があると考えたカミュは、1939年12月に次のように記している——「もしこの現在の紛争が蔓延するならば、国家概念と利己主義的敵対関係が同時に糾弾されるべきことは火を見るより明らかであろう。そしてそれは、ドイツ、イギリス、ラテン諸国と同様にソ連にも当てはまるだろう。とにかく、解決はこうした方向にはない。そして過去の怨恨によって歴史をつくることはできないし、逆に将来への希望に基づいて歴史を築きあげるべきである」(Albert CAMUS, «Sous les éclairages de guerre»: Pas de "croisade", *Le Soir républicain*, 13 décembre 1939, repris dans ses *Œuvres complètes*, t. I, p. 780)。
- 36) CAMUS, *La Peste*, in *Œuvres complètes*, t. II, p. 98.
- 37) Voir Yosei MATSUMOTO, «*Le Premier homme*: le processus d'élaboration», in *Albert Camus 20*, Paris : Lettres Modernes Minard, 2004, pp. 15-32.

- 38) Voir Agnès SPIQUEL, « Notice du *Premier homme* », in CAMUS, *Œuvres complètes*, t. IV, pp. 1513-1514.